【鬼北町景観計画の背景と目的】

鬼北町には、四国山地に囲まれた盆地の中に、日本最後の清流と呼ばれる四万十川の支流の１つとして町民に親しまれている広見川が町の中央を貫流しています。さらに、町域の約85％を森林が占めています。

そんな自然豊かな環境に恵まれた本町は、これまで景観を大きく損なうような場面に遭遇したことがありませんでした。しかし、近年、本町を取り巻く社会資本の整備や生活様式の変化に伴い、町民の誇りでもある広見川流域の自然も徐々に変わりつつあり、地域の特徴的な景観が損なわれることが危惧されるようになりました。

さらに本町では、町の歴史的な形成過程の中で、生活に密着したまち並みや、古くから受け継がれた農地が息づいています。

このような背景の中で、先人から受け継がれてきた貴重な財産を次世代に継承すること、現在の良好な景観を後世に残せるよう維持すること、さらに、特徴的な景観については積極的に保全することを目指した「鬼北町水と緑の景観まちづくり」を目的として鬼北町景観計画を策定し、良好な景観の保全に努めていきます。

景観計画区域 2 愛治地区・大宿の棚田の農村景観

町内の水田景観には、広見川、三間川や奈良川の流域に広がる平坦な景観と、小河川の流域に存在する棚田などがあり、小河川沿いの棚田は本町の地形から生まれた産物として、先人たちの農地確保への強い信念が感じられ、その意欲が伝わってきます。

中でも、愛治地区の大宿の棚田は、他の棚田と異なり、地区から産出した石を積み上げた石積から構成され、周辺の環境に溶け込むとともに、地域の景観を際立たせています。

さらに、近年「穂田るの里の幻灯火」が行われるなど、貴重な景観を存続させる気運が高まっています。これらのことから、愛治地区の大宿の棚田を景観計画区域として設定します。

穂田るの里の幻灯火

景観計画区域 1 広見川の河川流域景観

本町の低地部には、四万十川の支流として多くの河川が流下しています。特に町の中央部を流下する広見川は、多くの町民に親しまれているとともに、町内における代表的な水辺空間として、景観要素の一つとなっています。

現在も、四万十川の支流としての清流の確保への取り組みが行われていることや、町民の広見川に対する思い入れなどから、将来的にも本町の貴重な景観要素として受け継いでいく必要があるため、広見川の河川区域を景観計画区域として設定します。